



## 『トクシマ・アンツァイガー』

第 15 号

徳島 1915 年 7 月 11 日

### われわれの植民地（2）

北緯 2 度から 13 度の間にあるカメルーンは、ドイツとほぼ同じ広さで、350 万の人口を持ち、アフリカの基準からすれば非常に人口密度が高い。実に好都合なことに、この地域はギニア湾の最も奥まった角にあり、これは内陸との連絡にはとても恵まれた立地条件である。ただ、この植民地は残念ながら港があまりなくて、海洋船舶はカメルーン湾しか航行できない。最も重要な港は、政庁のあるドゥアーラとヴィクトリアである。

高温多湿の沿岸低地の気候は健康には非常に悪く、特にマラリアと黒水熱がしばしば発生する。この点に関しては、カメルーン山地やこの領土の大半を占めるサバンナ高原の方がましである。この高原は、東の方でチャド湖周辺の低地と接している。

沿岸の低地からは、ヤシ油、ヤシの実、生ゴム、象牙が産出される。広

大な草地のある高原は、野牛とレイヨウの大群を養っている。

二本の鉄道が建設中であるが、その一本は、チャド湖まで達する予定である。

アフリカにおけるわれわれの領土の中で最小ではあるが、本国からの資金援助なしでもう何年も経営できている唯一の地域が、トーゴである。ここは上部ギニアの沿岸にあり、バイエルンと同じ広さを持ち、約 100 万の住民がいる。狭い海岸にはひとつも港がなく、交通の一部は、ここを取り巻いている英仏の植民地を経由しておこなわざるをえない。

政府の所在地は海岸にあるロメで、ここは同時にこの植民地で最も重要な商業都市である。

海岸の狭い土地ではヤシの実やとうもろこしなどが獲れ、最近では上質の綿花の栽培に成功している。後背地には密林が繁茂し、特に黒檀や紫檀を産出している。

次に、われわれの最も新しい植民地である南海の領土を見てみよう。ここは、オーストラリアとアジアの間にある西太平洋に広く散らばった島国である。総面積はドイツの約半分になり、50 万の住民がいる。

気候は高温多湿の熱帯性であるが、かなり多くの島では健康によい。特にサモア諸島は、ヨーロッパ人にも快適な気候なので、賞賛されている。

この植民地は、それぞれ特色のある三つの地域に分けられる。マリアナ諸島、カロリン諸島、パラオ諸島、マーシャル諸島を含むミクロネシアと、カイザー・ヴィルヘルムスラント<sup>1</sup>、ビスマルク諸島、ソロモン諸島中のドイツ領の二島からなるメラネシア、そしてサモア諸島の中のわれわれの二つの島からなるポリネシアである。

これらの地域は島国なので、当然港には恵まれているが、母国との交通には不都合な位置にある。定期船による連絡は、国家の援助によってのみ維持することができる。

この領土の主な輸出品は、コプラ（ヤシの種を乾燥させたもの）であるが、

---

1 ニューギニア島の北東部。現パプア・ニューギニアの一部。

綿花、コーヒー、カカオ、生ゴムのプランテーションも、重要性を増している。原住民はまったく仕事嫌いといってよいほどなので、プランテーションを営んでいる企業は、残念ながらつねに重大な労働力不足に悩んでいる。中国人、ジャワ人、インド人がわれわれのプランテーションで働いている。マーシャル諸島からは、燐酸塩がさかんに輸出されている。

---

## 日本の歴史（14）

家康の後継者たちのもとで、日本は絶対的な警察国家へと発展した。ここではあらゆる状況が事細かに統制されており、人間の活動のすべての領域が監視されていた。大事とされたのは、徳川一門をできるかぎり安泰にすることであった。大名の側からのあらゆる危険を排除するために、三代将軍家光は、すべての大名の家族はいつも、そして大名自身は一年おきに、江戸（東京）に住まねばならないという規則を作った。平和な時代が長く続き、この国はある意味では繁栄した。しかし、代々割り当てられている仕事の領域を越えてはならないという偏狭な閉鎖性によって、大局から見おろす国家的・精神的な観点はすべて萎縮する危機にさらされていた。固定した障壁が、生業に専念することを義務づけられている大部分の国民である農民、職人、商人を武士から隔てていた。武士たちには、国政や軍事の仕事は開かれていたが、利益を目的とするどんな職業分野も禁じられていた。芸術は新たな興隆を迎え、多くの諸侯の宮廷で好意をもって庇護された。特に小物工芸は、刀剣の装飾や漆・象牙の道具において、比類のない成果を産み出した。

精神的・政治的活動の中心は、いまやたえず膨張を続ける江戸となった。この町には水道が備えられ、立派な街道によって地方と結ばれた。

この国は 200 年以上にわたって外国からの孤立を守った。その結果、日本はこの間に進歩した西洋に比べて遅れることになった。徳川家の支配が

倒れて、ようやくこの国は再び外国からの影響を受け入れる体制ができたのである。

つづく

---

## 日本の農業（2）

日本の農作物の中で米は抜きん出て重要である。米が国民の栄養において果たす役割は、わが国の貧困な地域でジャガイモが果たす役割と同じである。米作には特に細心の世話が必要である。周知のように、稲は湿地の植物である。最初の三ヶ月は水浸しの土地に生えるものであり、次の三ヶ月も、少なくとも湿った地面が必要である。稲田にはたいてい人工的に水が引かれる。多くの場合は足踏み水車が使われるが、読者の多くはすでにこれを散歩のときに目にする機会があったであろう。稲はイネ科に属している。収穫の時期により、早稲（わせ）、中手（なかて）、奥手（晩稲・おくて）に分けられている。種蒔きは通常直接田におこなわれるのではなく、まずは特別な苗床で小さな苗が育てられる。苗の植え替えは、普通種蒔きの6週間後におこなわれる。この後稲は急速に生長する。収穫はだいたい9月のはじめにおこなわれるが、そのときまで灌漑とたびたびの施肥、除草という非常に骨の折れる労働が要求される。稲は日本のすべての穀物と同様に鎌で刈られ、小さな束にまとめられる。一回分の収穫量は、蒔いた種の30倍から100倍になる。1ヘクタールの土地から通常約60ツェントナー<sup>2</sup>の米が獲れる。

われわれは穀物の脱穀のさいに、穀竿（からざお）か脱穀機まで使うが、日本では茎から穀粒を分離するために、わが国で亜麻を作るときのように、茎を鉄の櫛〔せんばこき〕に通すのである。それから米粒はたいてい木摺白で殻を取られる。殻を取られた米は玄米と呼ばれる。この玄米は、次に

---

2 1ツェントナーは50kg

木か石の桶の中で木によって突かれるが、それは皮膜と中身が分離するまで続けられる。このように手を加えられることにより、米は周知のような白い色になる。これを「精白する」とも言う。日本の米は、すべての米の種類の中では最も良質のもので、かなり値段が高い。そのため、米は日本の農民が自分たちで食べられないほど高価なものだ。農民は、ひえか、ひえと米を混ぜたもので満足している。非常に興味深いのは、日本人が、彼らの作った上質で高価な米のかかなりの部分を輸出しているのに、他方ではその代わりに品質の劣るもっと安い種類の米を、主としてシヤムから輸入していることである。国民のこの大切な食料である米の出来は、中国と同様日本にとってもきわめて重要である。日本の米取引の中心は大阪である。大阪、東京といくつかの場所には米市場があり、そこでこの穀物は活発な投機の対象となっている。

つづく

## この戦争におけるスイスの慈善事業（2）

スイスは、気高い心遣いでもって重傷の捕虜や傷病兵の世話を引き受けてきた。ひどい戦傷を負った人々は、すぐれた訓練を受けたスイスの医療班に助けられて、スイスの病院列車に搬入される。これらの列車はスイス軍によって提供され、車内の設備はスイス赤十字によって提供されている。すべての傷病兵は、ドイツ人もフランス人も、スイスの医療設備とスイス国内の輸送の準備や実施を賞賛した。スイスを通っている間、傷病兵たちは山のような慈善の贈り物をもらう。これまで850名の傷病ドイツ兵が故郷に送り届けられた。もともとの取り決めでは、交換されるべき将校の数は双方同数のはずだったが、これまで送り返されたのはフランス将校24名に対してドイツ将校は4名しかいない。皇帝陛下の格別の思し召しにより、フランス傷病兵の帰還はいかなる見返りもなしに続けられている。さ

らに次のことにも触れておくべきであろう。教皇の仲介により、長い交渉の末に傷病兵捕虜の交換が決定されたのだが、その最初の提案はスイスから出されたのである。さらに今、スイスはこのすばらしい博愛的な仕事を実際に大規模に遂行している。

最後に、戦争捕虜と彼らの故郷との通常の郵便の輸送について述べておこう。われわれ日本にいる戦争捕虜も、直接その恩恵を受けているからである。1907年のハーグ協定によれば、捕虜には家族と郵便のやり取りをする権利が認められている。互いに交戦している国々の間での直接的なやり取りは不可能なので、中立国の援助が必要である。いつでも援助の心積もりがあるスイスは、ここでもまた手を貸してくれた。郵便の仲介のすべては、スイスによりまったく無償・無料でなされているのだ。スイスの慈善事業のこの部分において、いかに膨大な仕事が行なわれているかということが、次の数字によって推測できるだろう。1914年9月から1915年2月までの期間に、9,275,741通の手紙と葉書、259,832通の郵便小包がドイツにいるフランス人捕虜のために、また8,536,383通の手紙と葉書、221,357通の小包がフランスにいるドイツ人捕虜のために送られた。今では毎日平均150,000通の手紙がベルンの中継郵便局で受けとられ、捕虜たちに送られている。発送物は、外国の交換郵便事務所（フランクフルト・アム・マイン、ミュンヘン、シュトゥットガルト、ウィーン、ポンタルリ）から、ほとんど仕分けされずに入ってくる。ベルンの郵便局は一各地の捕虜収容所、野戦病院、市町村への一仕分けというたいへんな仕事を引き受けなければならない。スイス人たちが、買って出た仕事をいかに正確にやっているかということは次のことから見て取れる。彼らは、耳に心地よく響く方言でいうところの「小包の病院（ペックリ・クリニーク）」を作り、損なわれた送付物をそこで梱包し直しているのである。フランス人たちは、郵便でしばしば重量制限以上の物を送っている。例えばドイツにいる二人のフランス人捕虜は、7キロと9キロのアコーディオンを受け取り、もうひとりの捕虜は長さ50センチの人形を受け取った。住所につい

では滑稽なことがいろいろと起こっている。ドイツからブルシュ [Bursch] にいる捕虜宛の手紙を受け取るスイスの郵便局員は、この手紙がブルジェ [Bourges] に送られるべきことを知っている。ドイツ語の「検閲済み」 [geprüft] の印や「監督将校」 [Überwachungsoffizier] というメモを、多くのフランス人は地名と思い込んで、これを返事の手紙に宛先として書き込んでしまう。

郵便為替のやり取りによって、スイスにはもっとたいへんな作業ができてしまった。もとの為替の金額を、宛先の国の貨幣価値に換算して、新しい郵便為替に記入しなければならないからである。

小包のやり取りは、重さ 5 キロまでなら関税も郵便料金がかからないが、ジュネーヴの郵便局を通しておこなわれている。送られた小包の一日の平均は、二月には 10,463 個にのぼっている。

人道的奉仕のこの途方もない仕事のすべてについて、われわれも、また全ドイツ国民も、スイスに静かな感謝を捧げるべきであろう。

おわり

---

## 収容所生活より

酷暑の日々が近づいている。これまでは意外に長いあいだ、夏の暑さに悩まされなかったが、これからはやはりひどくなりそうだ。最近の土砂降り雨はやんで、からりとした暑さが始まった。毎日決まった時間に戸外で水浴びできるようになるのを、皆が待ち望んでいる。その準備がすぐに終わればよいのだが。

われらのサッカープレーヤーたちは、久しぶりに晴れた日々の一日をさっそく利用して、また緑の草地に出て行った。ところがあいにく少なくとも二件の重大事故が発生した。二等砲兵ヘルムートは足先を、二等砲兵シロは足を骨折したのである。二人とも早く治ってほしいものだ。なにし

ろこの季節に病院のベッドに横たわるのは特に不快なことだから。

雨があがったのでわれらのオーケストラもその活動を再開したが、サッカープレイヤーたちよりも幸運だった。というのも、これまでのところ、オーケストラの悩みは何本かの弦が切れただけなのだが、これは骨折ほど痛くはないし、回復も早いからである。

オーケストラの定期リハーサルが再開されており、とても長い間なかったコンサートがまた聴けるのではないかと期待させてくれる。ただ、これは今後もよい天気が続くかどうかにかかっている。というわけで、乞うご期待。

-----

## チェス・コーナー

(駒の略語 K=キング、D=クイーン、L=ビショップ、  
S=ナイト、T=ルーク、B=ポーン)

### 第 23 問解答

1. Te2 - e5 任意の手
- 2 D か L で詰み

### 第 24 問解答

1. Tb5 - b3 Kd4 - e5
2. Tb3 - e3 Ke5 - d4 (f4)
3. De1 - c3 (g3) 詰み

これ以外の変化も簡単である。

正解送付者:ベーマー、ライポルト、ラングロック、ヨーゼフ・ヴェーバー、ローデ

第 25 問 白: Kf1, Dg3, Tc5, Lh8, Bc2, g4

黒: Ke4, Df7, Td8, La1, Bd3, f2

2 手詰め

第 26 問 白: Kd6, Df2, Tc5, Bc3.

黒: Kd3.

3 手詰め

## 「エムデン」上陸隊体験記（1）

今故国から届いた新聞には、「エムデン」乗組員でフォン・ミュッケ海軍大尉指揮下の上陸部隊の冒険について、詳細な報告が載っている。

今日はまず、『華徳日報』から引用した第一部からはじめよう。この部分はココス島からホデイラまでの道程を描いたもので、フォン・ミュッケ大尉によって語られた。

私は大急ぎでこの島を後にしようと決心した。「エムデン」は去り、危険が大きくなったのだ。一か八かだ、と私は考えた。港に三本マストの帆船が停泊していることに気づいていた。中マスト帆がついているスクーナー「アエシャ」である。この船と島の所有者であるミスター・ロスは、船底に水漏れがあると注意してくれたが、この船は大丈夫だと私は思った。そこで、大急ぎで八週間分の糧食と四週間分の水を積み込んだ。イギリス人たちはとても愛想がよくて、われわれに最上の水のありかを教え、服や道具をくれた。それはわれわれの「穏和な態度」と「寛容さ」へのお礼だというのだ。彼らはそれからわれわれの仲間たちに名前を聞かれ、それをメモされた。彼らはわれわれの仲間の写真を撮り、最後に残った一艘のボートのそばで三度万歳と叫んだ。われわれは出帆した。私は簡単な挨拶をしたのちに、乗組員たちが万歳三唱する中で「帝国軍艦アエシャ」にドイツの軍艦旗を掲げた。

「アエシャ」は本当にしっかりした船だった。しかし、われわれにはほとんど船具がなかった。船内には六分儀と二つのクロノメーターしかなく、しかもクロノメーター日誌はなかった。これは最小限の船具と言えるが、私は船内で1882年の『インド洋案内記』を見つけ出した。この本にはいくつかの典拠があったが、それらは大昔のもので、1780年にまでさかのぼる。

まずわれわれは、操帆装置全体をしっかりと使えるようにしなければなら

なかった。というのも、私はもちろん平和を信用せず、イギリス人の船長を島に置いてきたからである。私は東アフリカに向かうと言っておいた。だから、まずは西に進み、それから北上したのである。そのときは季節風が吹いていたが、凧（無風状態）のときも多かった。不気味に静かなうねりの中で、私はしっかりと固定された帆のそばに、犬のように座っていた。そんなときわれわれは罵りの言葉を吐いた。本気で考慮の対象になった目的地は、二つの中立港、バタヴィアとパダンだけである。もちろん、はじめは青島を考えた。キーリング島で用心深く青島のことを尋ね、たまたま青島の陥落を知った。そこで私はパダンに行くことにした。「バタヴィアまでは6日から8日かかるよ」と、キーリング島で船長は言っていた。今回われわれは、パダンまでの90マイルに18日を要した。それほど何日もの間風が吹かなかったのである。

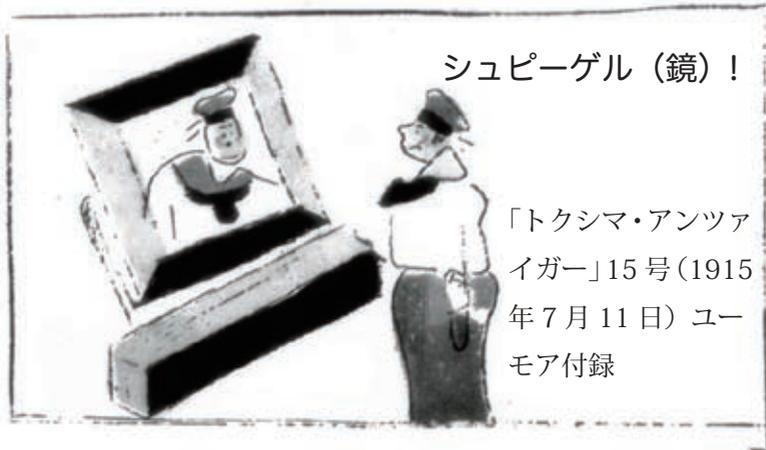
船内には有能なコックがいたが、彼はかつてフランス外人部隊にいたことがある。とはいえわれわれは水を節約せねばならず、各人には毎日コップ3杯が割り当てられた。雨が降ると容器は総動員で、水を受け止めるために大きな帆が船室の上に張られた。乗組員全員が裸で歩き回っていたが、それは真水を節約し、服や下着を傷めないためである。それというのも、キーリング島でもらった衣服はすぐにぼろきれになってしまったからである。歯ブラシはもう長いことお目にかからなくなっていた。髭剃り器は順繰りに回された。船にあった櫛は高価なのがひとつだけだった。

11月26日、ついにパダンの近くまでたどり着いたが、そこではじめて船が現れ、われわれの船の名前を探っていた。名前は英語で書かれていたので、上塗りして隠していた。この船は、行ってしまったかと思っていると、夕方またやってきて100メートルの距離まで近づいてきた。私は全員を甲板の下に行かせ、ひとり、孤獨な船長を装って甲板の上に出た。しかし、モールス信号によって船名は洩れていた。やってきたのはオランダの水雷艇「レイン」であった。私は英語の信号で一度、ドイツ語の信号で二度、なぜ追ってくるのかと尋ねた。答はなかった。翌朝、すでにオランダの領海にいた

ので、私は信号旗と軍艦旗を掲げた。すると突然「レイン」はわれわれのそばを全速力で通り過ぎた。通過のさいに、私は部下たちを左舷で整列させ、挨拶した。同様の挨拶が返ってきた。それからパダンの港の前で、きれいに保存していた制服を着て「レイン」に乗り込み、私の意図を説明した。艇長の考えでは、入港はできても出港できるかどうかは分からないとのことだった。……

そちらを拿捕された船として扱いたい、と言われた。私は、当方は軍艦であると言って、四つの機関銃を指し示した。港湾当局は、軍艦旗と信号旗、私がこの軍艦の指揮官であることを示す文書を、証拠として要求した。私は、そのことについて弁明する必要があるのは自分の軍に対してだけであると答えた。すると彼らは、おとなしく拘留されるべきだと強く勧告した。……もちろん私は、こうしたすべての平和的提案を拒絶し、しかもそのとき部下の少尉たちを同席させた。私は糧食と水、帆、索具と衣服を要求した。

つづく



太っちょとやせっぽちを貫いて  
(苦楽をともに)<sup>3</sup>

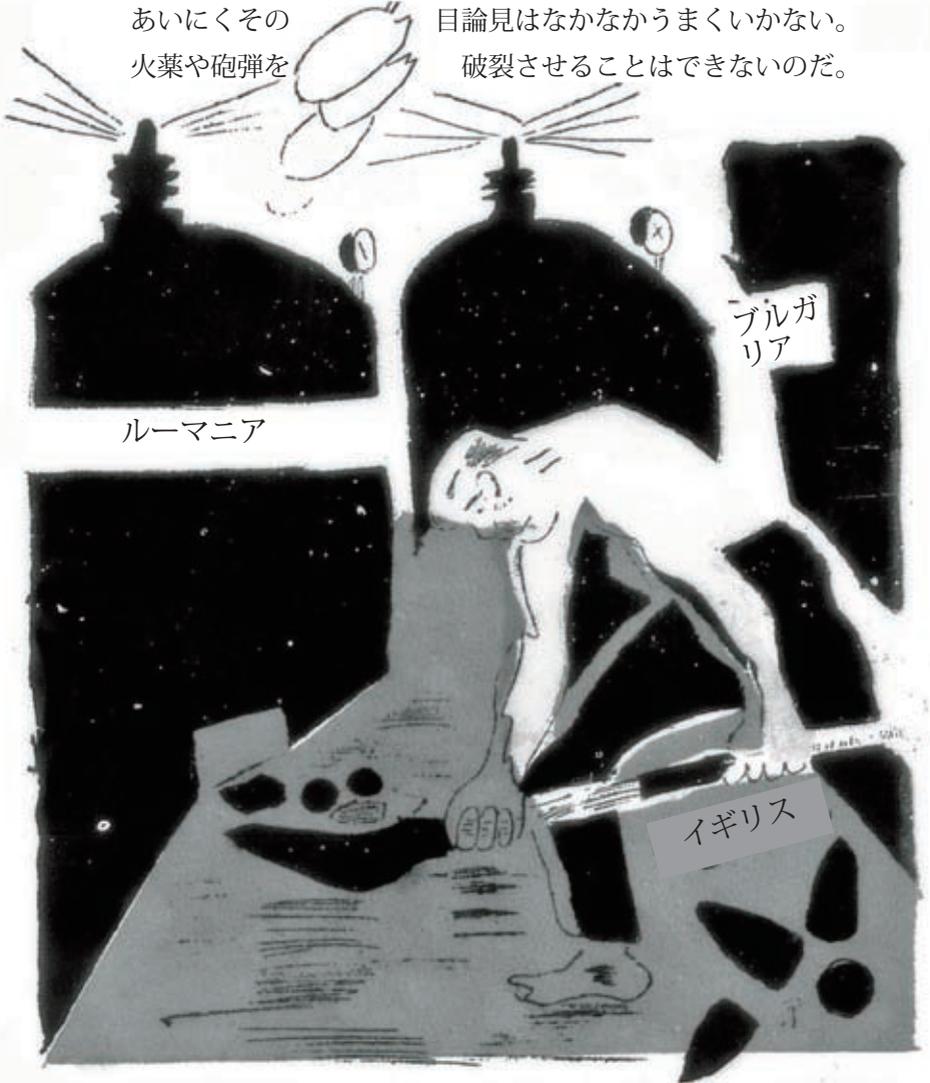


3 原語 Durch Dick und Dünn には、慣用句的に「苦楽をともに」という意味があるが、この訳のような逐語的な意味もあり、両方にかけてもの。ドイツ風のヘルメットをかぶった兵士の銃剣が、太ったイギリス水兵と痩せたフランスの将校(?)を貫いている。

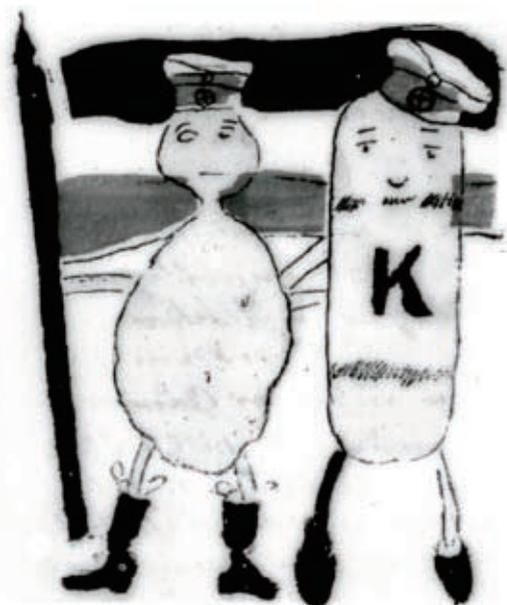
## 仕事熱心な火夫

湯気がシュッシュと音を立て、釜は灼熱している。  
火夫がもう長いこと骨折って仕事をしているから。  
彼は火薬と砲弾でもって焚きつけているのだ。  
けれども、彼の期待はたぶんはずれるだろう。  
あいにくその  
火薬や砲弾を

目論見はなかなかうまくいかない。  
破裂させることはできないのだ。



## われらは戦い抜く



二人の戦士がいて、  
われらの敵に憎まれている。  
ひとはKパン<sup>4</sup>で、  
だれもがこれを好む。  
もうひとは  
ジャガイモの塊で、  
今はこれを  
みんながとても  
節約している。

-----

諸君は信じるのか。われわれが餓えていると。  
本当のことを聞きたいか。計画は失敗し、  
夢まぼろしになるだけだ。  
諸君は信じないのか。諸君が捕虜となって  
歓迎される身となったとき、  
われわれを尊敬することになるのを。  
われら二人組は、諸君をいためつける。  
Kパンとジャガイモも、武器なのだ。  
われわれが戦いを勝ち抜くための。

---

4 軍用黒パンのこと。

## 戦争の新しいメルヒェン

昔のこと



1. 昔のこと、イギリスにある兵隊の息子がいました。キッチナーの陸軍に、志願して入りました。
2. 昔のこと、ロシアにある提督がいました。戦艦を造るため、政府が一千万ルーブルをくれました。一年後、提督は大戦艦ができたと報告し、それから政府に使わなかった五百万ルーブルを返しました。
3. 昔のこと、フランスにある大元帥がいました。攻勢をとって、それから本当に勝利を得ました。
4. 昔のこと、あるベルギー人がいました。ドイツの野蛮人に、両手、両耳、首を切り落とされていました。それから中立の国に行き、敵にしてもらった心優しい待遇について、感激の報告を書きました。
5. 昔のこと、『クロニクル』という新聞がありました。まだ一度も嘘をついたことがありませんでした。